

「アーバニズム・プレイス展2018」という場の創出

The Making of Urbanism Places Exhibition 2018

中島 直人 東京大学
Naoto NAKAJIMA

1. はじめに

都市計画法50年・100年企画特別委員会の活動の一環として、2018年9月15日から23日にかけての9日間、新宿三井ビルディングにて「アーバニズム・プレイス展2018 都市計画の過去と未来の創庫」を開催した¹⁾。都市計画が生み出してきた都市空間という視点からこれまでの都市計画の歩みを整理すると同時に、これからの都市計画を展望しようという目的で企画したものである。これまで世界各地で都市計画に関する様々な展覧会が開催されてきたが、本展覧会は、①「都市計画遺産」という観点から都市計画の歴史的な展開過程を整理する、②展示会場そのものが伝達すべき都市空間であり、体感性を有する、③都市空間の日常的な空間利用の中に展示が織り込まれている、④展示自体が広場を生むコトとしてデザインされている、といっ

た点に特徴があると考えられる。以下、この4点に沿って展覧会の概要を説明していきたい。

2. 「都市計画遺産」という観点

都市計画法制定・改正からの50年、100年というアニバーサリーイヤーにおいて、法制度に着目するのはごく自然なことである。しかし、これも当たり前のことだが、都市計画法制度は運用され、具体的な都市空間に影響を与えることで初めて人々の生活の役に立つものである。法制度と人々の生活の間には都市空間が介在している。加えて、都市計画法制度=都市計画ではない、ということも重要である。都市計画法制度を核としつつ、都市計画という広がりのある世界が形成されている。「都市計画遺産」は、そうした都市計画の世界が50年、100年の間に生み出してきた都市空間を、いわば結果論的に見つめる眼差しであり、都市計画が都市生活の豊かさとのような関わり合いを築けたのか(築けなかったのか)、その点を省察するための切り口である。「都市計画遺産」はこれからの都市生活の豊かさを支える可能性を秘めたストックのことでもある。

「アーバニズム・プレイス展2018」では、都市計画を広義に捉えるために「アーバニズム」という言葉を掲げた。そして、人々との関わりに視点を据えて都市空間を捉えるために「プレイス」という言葉で受けた。「アーバニズム・プレイス展2018」の最後の「2018」は、この試みを一回切りでは終わらせず、毎年か、あるいは隔年で続けていこうという意志の顕れである。というのも、都市計画が生み出した人々との関わり合いの深い都市空間というだけでは、多種多様な都市空間が思い浮かぶ。一度にそれらの全体を把握し、提示することは難しい。そのため、2018年はまずは都市の中の広場を取り上げてみることにしたというのが実際のところである。都市計画は「広場」という都市空間に、

コミュニティや市民社会の理想や願望を仮託し続けてきたのではないかと、というのが本展覧会を基礎付けている仮説である。

3. 都市計画が生み出した卓越した都市空間の体感

アメリカ都市計画協会(American Planning Association)は、他の規範となる性格、質を有する、都市計画により生み出された場所を称揚するプログラム「アメリカの偉大な場所(Great Places in America)」を展開している。複雑化し、理解が難しくなっている都市計画の現状に対して、「人々と都市計画との絆をつくる」「なぜ、その場所がよいのか。「偶然ではない」ことを知らせる」「多くの人が場所の良し悪しに関心を持つきっかけとなる」という目的で2007年に開始された取り組みである。このプログラムでは眼に見える都市空間がコミュニケーションツールとして機能することが期待されている。卓越した都市空間そのものに都市計画とは何かを語らせる、という考え方である²⁾。

「アーバニズム・プレイス展2018」では、アメリカ都市計画協会の取り組みも参考にしながら、まず何よりも都市計画が生み出した卓越した場所自体を人々に体感してもらうことが大事であると考え、そうした場所を会場として選定することにした。広場の創出過程における都市計画の貢献具合と現在の都市空間の質、使われ方などを勘案し、検討を重ねた結果、新宿西口超高層ビル街の一角にある新宿三井ビルディング足元の55HIROBAこそが今回のテーマに最もふさわしい場であると判断した。55HIROBAは特定街区制度による有効空地として提供された広場であるが、敷地内での配置計画、広場のデザイン密度の両面で最も高く評価されるということと同時に、広場建設後も継続的なマネジメントがなされ、現在も多くの人々に実際に使われている都市空間であるという点が重要であった。さらに加えて、新宿西口超高層ビル街そのものが戦後都市計画の都市像を最も純粋に体現した地域であり、当然そのような都市像が抱える大きな課題も含めて、55HIROBAが都市計画のこれまでとこれからを議論するのに最も相応しい場であると考えたのである。

4. 場の日常的な空間利用の中に織り込まれた展示

「都市計画遺産」という観点から本展覧会のメインとなるコンテンツは、都市計画がこれまでに生み出してき

た広場をカタログ的に紹介する「Great Public Places since 1919」と、新宿という街および55HIROBAの計画・設計の意図やプロセスを伝える「Shinjuku Public Place Chronicle」であった。これらをどのように展示するのか、特に都市空間の体感を会場選定の軸としたゆえに、展示そのものがその都市空間の日常的なありようを変えてしまう可能性があるということにどう対処するのか、展示デザイン上の課題となった。

「アーバニズム・プレイス展2018」では、展示デザインのコンセプトを、その場の日常的な空間利用の中に展示物を自然なかたちで織り込むこととした。具体的には、「Great Public Places since 1919」では、既存のテーブル一つひとつを展示ポスターの掲示台として利用することにした。55HIROBAには40脚の方形のテーブルとイスが整列して並べられているが、そのテーブルはそのままの配置にして、テーブルの表面にポスターを貼り付け、透明のビニルシートでコーティングすることで、テーブル利用者の目にそのポスターが自然と入ってくるという関係を生み出した。ただし、そのテーブルの利用者以外にはポスターを見るのが難しくなるため、ポスター内容をInstagramに全てアップし、会場に掲示したQRコードを読み込むことで、画面上ですべてのポスター内容を閲覧できるようにした。

また、全ての展示物を55HIROBAという屋外空間に展示するとなると、設計当時のオリジナル史料や映像といった類のものの展示が難しくなる。とりわけ「Shinjuku Public Place Chronicle」では、そうした史料や映像が重要なコンテンツであったため、その展示方法については検討を要した。結果としては55HIROBAだけではなく、新宿三井ビルディングの2階ロビーに設けられたラウンジスペース55SQUARE southも展示空間として活用させて頂くことになった。新宿三井ビルディングでは、近年、低層部のありかたについての検討が進められ、従来のロビー部分をラウンジ、コワーキングスペースにリノベーションするなど、超高層ビル街の足元に中間の公共空間を生み出す試みに着手していた。2階ロビーのラウンジではスタンディング形式で利用するロングテーブルが二台、新設されたが、「Shinjuku Public Place Chronicle」ではそのロングテーブルの細長い形状を活かし、年譜形式でのパネルを作成し、テーブルにはめ込むこととした。つまり、ここでも日常利用を妨げない展示を心掛けた。実際に会期中には、通常通りのワークスペースとして、パネル面にパソコンなどを拡げて作業する人



図1 「アーバニズム・プレイス展2018」の全体構成(フライヤーより抜粋)



図2 「アーバニズム・プレイス展2018」の会場風景

の姿が少なからず見かけられたのである。

5. 展覧会自体に組み込まれた広場を生み出すコト

「アーバニズム・プレイス展2018」では、これまで生み出されてきた広場のみならず、今、まさに生み出されようとしている広場の空間、その創出手法についても展示内容に含めることにした。それが東京都内各地で行われているこうした空間の暫定利用、社会実験で実際に使われた様々な空間創出ツールを展示品として配置する「Place Making Exhibition」であった。都市空間の日常使いを損なわない展示を追求する一方で、広場を生み出す現在進行形の取り組みを効果的に展示するためには、展覧会自体が広場を生み出している、広場創出の実践となっている必要があった。

55HIROBAを見下ろす位置に設置されている歩行者専用デッキは、日常的にはあまり歩行者通行量の多くない空間であった。この空間を「Place Making Exhibition」の会場とし、社会実験で使われたベンチやパラソル付きの自転車と並べることで、このような空間の使い方の可能性を示すこととした。つまり

「Place Making Exhibition」自体を既存の都市空間ストックを活用した広場創出の最新の取り組みを実践的に提示するものとしてデザインしたのである。企画段階では移動屋台での飲食物の提供などを実施することを検討していたが、運営体制面で実現が難しく断念した。もし実現していたら、「55HIROBAを見下ろしながら休憩する場」がより充実したものになったであろう。

また、「アーバニズム・プレイス展2018」では、4回にわたるトークイベント「Place Talk」を実施した。企画者が登壇した「アーバニズム・プレイス・レセプション」(9月15日)、日本設計の新宿三井ビルディング設計チームメンバーによる55HIROBA創出に関する貴重な証言の場となった「新宿三井ビル・55HIROBAの誕生と再生」(9月18日)、新宿西口超高層ビル街全体の公共空間の今後について議論した「新宿からの都市の広場論」(9月21日)、新宿西口の話題をこれからの都市計画のありかたにまで展開させた「広場を楽しむ都市計画へ」(9月23日)である。

55HIROBAの中で少し高い位置にあるステージ部分で、しかし周囲に対してはオープンなかたちで開催されたこれらのイベントでは、必ずしもトークを聞き

表1 「アーバニズム・プレイス展2018」でのアンケート集計結果(抜粋)

個別展示の評価	Great Public Places	Shinjuku Public Place Chronicle	Place Making Exhibition	Place Talk
	1非常に面白かった 2面白かった 3普通 4退屈であった 5非常に退屈であった			
全体(133)	1.923	1.593	2.127	1.463
都市・建築関係の専門家(106)	1.93	1.554	2.157	1.515
上記以外(27)	2	1.792	2.182	1.273
展覧会全体の評価	都市計画の歴史について新たな知識を得ることができた	都市計画のこれからの役立つ知見を得ることができた	都市計画とは何かについて改めて考えさせられた	身の回りの都市空間や場所についての見方が変わった
	1はい 2 3どちらとも言えない 4 5 いいえ			
全体(133)	1.504	1.656	1.634	1.847
都市・建築関係の専門家(106)	1.515	1.621	1.615	1.885
上記以外(27)	1.519	1.852	1.704	1.704

に来たオーディエンスだけでなく、周りのテーブルに座った人が途中から耳を傾け始めたりする様子も観察された。また、雨天での開催となった日には、広場を巡るトークによって夕闇の中で広場の一角、雨に濡れないデッキ下空間が明るく浮かび上がる光景が生まれ、広場の新しいポテンシャルが発見されることになった。広場の中で広場について開かれた議論を行うことは、居場所としての広場に留まらない、人と人の交わりが何か新しいものを生み出すというコトとしての広場の姿を仮想的に例示することに他ならなかった。

6. 展覧会の評価と今後

広場の日常利用に織り込まれた展覧会であったため、展覧会全体としての来場者数を正確に把握することはできなかったが、「Shinjuku Public Place Chronicle」では、会期中、展示物をしっかりと鑑賞していった人は、およそ500名程度であった。「Place Talk」では、用意した席(回によって異なるが、20~40席)が毎回、埋まった。来場者による展覧会の感想、評価は、会期中、「Shinjuku Public Place Chronicle」および「Place Talk」参加者に配布したアンケート(回収数133)で把握した。天候に恵まれず、55HIROBAの展示物が湿気で悩まされたり、運営管理上、デッキ上での十分な展示ができなかったりといった課題もあったが、概ね企画者側の意図は伝わったようである(表1)。

なお、これからの都市計画史のあるべき姿として「開かれた都市計画史」を構想している筆者は、地域社会や非専門家に向けて、あるいはそれらの中から発信される「パブリック都市計画史」の概念整理や手法構築を研究課題としている³⁾。都市計画史が非専門家にとってどのような意味を持ちえるのか、非専門家に都市計画史をどのように伝えることができるのかという観点からは、「アーバニズム・プレイス展2018」においても、来場者の属性別の評価の違いも気になると

ころであった。専門家に比べて非専門家の参加者数は少なかったが、非専門家からは都市計画そのものというよりも、やはり「身の回りの都市空間や場所についての見方が変わった」という意見が多く聞かれた。

先にも述べたが、今後も「アーバニズム・プレイス展」を継続して展開していく予定である。「アーバニズム・プレイス展」は決して都市計画法50年、100年のための特別なイベントではない。都市計画の文化的側面を見つめ直し、社会との接点を増やし、コミュニケーションしていく持続的な取り組みである。本展覧会に限らず、様々な場所での様々なかたちでのこうしたコミュニケーションの取り組みを通じて、都市計画が人々の日常の関心事のなかで生き生きと存在している姿を実現していきたいと考えている。

<謝辞>

「アーバニズム・プレイス展2018」開催にあたっては、三井不動産株式会社、三井不動産ビルマネジメント株式会社、株式会社日本設計、新宿新都心開発協議会に多大なご協力を頂いた。ここに感謝の意を表します。

<補注>

- 「アーバニズム・プレイス展2018」の企画メンバーは、杉崎和久(法政大学)、園田聡(有限会社ハートビート)、高鍋剛(都市環境研究所)、高野哲矢(都市環境研究所)、中島伸(東京都市大学)、中島直人(東京大学)、中野卓(東京大学)、永野真義(東京大学)、西成典久(香川大学)、長谷川隆三(株式会社フロントヤード)、湯澤晶子(東京大学)である(所属は企画当時)。展示物、配布物のデザインはOTOSO.incが担当した。会期中の展覧会運営は、東京大学都市デザイン研究室、東京大学空間計画研究室、法政大学法学部杉崎ゼミが担当した。
- 「アメリカの偉大な場所(Great Places in America)」については、下記に詳しい。中島直人・津々見崇・佐野浩祥・初田香成・西成典久・中野茂夫(2015)「米国および豪州における「都市計画遺産」選定に関する近年の取り組み」『日本建築学会技術報告集』, 21巻48号, pp.795-800, 日本建築学会
- 「開かれた都市計画史」の構想については、下記に詳しい。中島直人(2018)『都市計画の思想と場所 日本近現代都市計画史ノート』, A5, 408頁, 東京大学出版会
なお、本展覧会は「パブリック都市計画史」の理論的・実践的探求(科研費基盤(B), 18H01603, 2018年度~2020年度)の一環として企画、実践したものである。